琉球大学学術リポジトリ

# 地理学に於ける正名：空間関係と地域（前）：シェーファー対ハーツホーン論争に関する解釈の系譜


| メタデータ | 言語:<br>出版者:<br>琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム<br>公開日: 2021-04-12<br>キーワード (Ja): 空間関係, 地域, シェーファー,<br>ハーツホーン, 正名<br>キーワード (En):<br>作成者: 益田, 理広, Mashita, Michihiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/48110 |

地理歴史人類学論集　No.10 (2021) pp.119-132
*Journal of Geography, History, and Anthropology*

# 地理学に於ける正名：空間関係と地域（前）

## ―シェーファー対ハーツホーン論争に関する解釈の系譜―

益　田　理　広

# Spatial Relation and Area :An Examination of core concepts as principle of geography in the Schaefer-Hartshorne Debate (I)

Michihiro MASHITA

**要 旨**

本研究は儒学的「正名」の伝統を範とする所謂シェーファー対ハーツホーン論争の中心概念,「空間関係」並びに「地域」の仔細な検証である．前編たる本稿では, 両概念及びシェーファー, ハーツホーン両氏の理論に関する既往の解釈に就て，その系譜を確認するとともに，各解釈に存する問題を剔出した．同論争に対する解釈には，主として①“空間を重視するシェーファー”と“場所に固執するハーツホーン”の対立として図式的に捉える者，②両氏の対立の原因を空間概念理解の哲学的相異に求める者，③両氏を新旧地理学の潮流の代表と考え，各々の美点に於ける融合を奨める者，④既に確定的な学史の一部として記述する者の四者が認められるが，孰れにも素朴な誤解と自説への付会が介在し，為めに混乱を来している．殊にハーツホーンに関する解釈は各論ともに不正確であり，両氏の著作そのものに即した「正名」が必須であることが自ずから知られるのである．

**キーワード**：空間関係，地域，シェーファー，ハーツホーン，正名

## Ⅰ　序：地理学に於ける正名

「正名」,“名を正す”と訓ずべき斯語は孔子の言を典拠と為す.『論語』に於て孔子は，高弟子路,果断を以て知られながらも其の気質の故に理知を軽んずる傾向のあった弟子の問うに応じ「正名」の語を発する．即ち，子路は「衛の君主が先生を招いて政治を任せられたとすれば，先ず何を為されますか(衞君待子而為政，子將奚先)」と問い，孔子は「先ずは必ず，名を正さねば(必也正名乎)」と答うるのである[1].

ここで謂う所の「名」とは,『論語集解』の引く馬融の注に依れば「百事之名」，つまりはあらゆる物事に与えられたる名辞であり,従って「正名」とは,この「名」が適切に概念内容たる「実」と呼応するよう「正す」ことに他ならぬ。然るに「正名」とは，現代風に言えば概念乃至は定義に関する精査検証に当たるのである。

かくして弟子は概念の検証を第一とする師の回答を得るが，此の剛烈の士は之を快しとせず，一言「迂遠」と歎じつつ，其の要不要に就き反問する(有是哉，子之迂也．奚其正)．ここで遂に孔子は子路の浅慮を斥け,「正名」の意義を具に説くに至る．曰く「概念定義の類が適正ならざれば論理や議論の先後も顚倒する．論理議論に於て先後顚倒などあれば意思疎通も適わず治世上の事務は成立し得ぬ．事務が成立し得ぬならば風習制度も社会に浸透せず，刑罰だに正当には執行されまい．刑罰の乱れた治世にあっては，人々は自らの手足さえ安んずる場を見出せぬであろう(名不正則言不順，言不順則事不成．事不成則禮樂不興，禮樂不興則刑罰不中．刑罰不中則民無所錯手足)」と，概念定義の混乱がゆくゆくは万民の生活を脅かすことを極言するのである．

かような孔子の思想を承け，古来儒家は概念定義に対する峻厳な分析を，現実を直に左右すべき学術の本務であると見做した．蓋し後世の儒書に「字義」「語義」と題する者の夥しく，儒学の理論が悉く経書の字句への注釈に於て公にされ，其の学統を飾りたる所以である(今井 1958 自序，p 一)．かく「正名」は，現今一般には知られざる儒学の本道の一端を為す.

さて，冒頭より早々，地理学とは無縁とも感ぜられる儒家の術語を紹介するのは，此の「正名」が地理学の理論研究に当たり必須と確信するが為め，且つは,「正名」に類する態度が其の必要に反して斯学に欠如するが為めである．諸学中蒼然と古色を呈するが如き儒学の論を以て，現今新穎の学術を御すと言えば奇異に感ずる向きもあろうが，学界を周覧するに，地理学の根幹を為すはずの諸概念に関する所説が乱立しておるにもかかわらず，それらの「名」を正さんと欲する研究が筆者自身の述作[2](益田 2015; 益田 2018) を除き見出すことにも窮する以上，かくのごとき概念検証の伝統は，其の新旧を問わず復興さるるべきと思わるるのである.

本稿は所謂“伝統地理学”と“現代地理学”の境界を為すシェーファー対ハーツホーンの論争を扱う[3]．筆者は地理学の全体論的学問たること，殊に其の実務としての地誌学の意義を疑わぬが，この種の意見が理論研究上好ましからぬ者として遇されておることは，例えば国内に於ても地誌学の理論的破綻と学術としての終焉を謳う論考が複数発表されながら(内藤 1994；中山 1996;森川 1992)，此れ等に対する有力な反論が見当たらぬ所からも容易に察せられる．而して，其の冷遇の根拠こそが,同論争の発端たるシェーファーによるハーツホーン評,所謂「例外主義」批判である．事の詳細は後述するが，此の「例外主義」は，ハーツホーン並びに同氏に代表される地誌学，或は「伝統地理学」全体の理論の本質であり又た致命的欠陥であるとして，現今の地理学界に広く受容されており，旧来の地理学は只だ「例外主義」的であるが為めに理論的破綻を来す，との酷評に甘んずるを余儀なくされておる．然るに，此のシェーファーとハーツホーンとの対立，或は新旧地理学の対立の根源はいづこにありやと問えば，それは惟だ両氏が地理学の対

象と規定する所の概念の相異に，即ち「空間関係 spatial relation」と「地域 area」の相異にこそ認められる．同時に，旧派の論がほとんど抛棄されるに至った現状に就ても，本論に示す通り，此れ等の概念の解釈の杜撰に起因する．要するに，地理学の中心を為すべき「名」が正されておらぬのである．

此の「名」の混乱の余波が両氏の理論的対立を遥かに超出することは，地理学，こと地理学史に通ずる者であれば再三するまでもなく首肯せざるを得まい．地誌学的諸研究の不興，後続新学派の浮沈，景観論及び地域論の途絶等々，其の論争の残響喧しきは地理学の理論は固より実務にまで及ぶのである．一つの「名」への散漫な解釈が諸方に弊を為す様は，まさに孔子の憂慮する事態と同一である．さればこそ，地理学には「正名」が希求される．それは断じて「迂遠」の道ではない．

されど，筆者が地理学史上の大論争に未済の混乱有りと宣言した所で俄に信ずる読者は多くはあるまい．そこで本稿は初め，件のシェーファー対ハーツホーンの論争に関して其の解釈の系譜を整理し，それら解釈に存する問題と，同論争そもそもの争点の剔出を試みる．次いでシェーファー及びハーツホーンの論ずる中心概念，即ち「空間関係 spatial relation」「地域 area」それ自体の検証に移るが，これに就ては紙数の都合により後篇に譲る．

## Ⅱ　研究背景及び目的

輓近の地理学史を繙く者にとって「計量革命」と呼ばれる一連の議論は，斯学の基礎理論の変革として最も鮮やかに記憶される一事であろう．それは，単に計量的な手法の導入に終始する者ではなく，「いわゆる科学的方法論の採用に基づく地理学の科学としての再編成を提唱した」「本質的に地理学の哲学，方法論に関する問題提起」(高橋ほか 1976:427) であり，ヘットナーからハーツホーンに連なる「個性記述」的な地誌学中心主義からの脱却を目指した運動であったとされる (野間 1976:2)．然るに，その発端となった論文こそが，Schaefer(1953) の「地理学に於ける例外主義―方法論的検証―. Exceptionalism in geography: A methodological examination」である．例外主義とは，分明な定義こそ見出し難いが，シェーファーに従えば「自然科学あるいは社会科学のいづれかとして各自所定の法則を探究すべき近代科学なる体系の一端を為しながら，地理学はなおも地域や景観といった非系統的な現象群の記述を事とする総合学術として学問領域を占有し得るとする観念」(Schaefer1953:231) と要約される所の者で，畢竟ずるにそれまで主流を為した地理学理論を揶揄する一種の蔑称である．但し，シェーファーの眼窩は旧来の地理学全体の許容を拒んではいたものの，其の誹謗の矛先は実質只の一人に，即ち，*The nature of geography*(Hartshorne1939) に於て，現象複合たる「地域 area」を対象として整然たる総合的地理学理論を構築したハーツホーン其の人にのみ向けられていた．これは，同時期の米国の地理学者への批判がシェーファー論文中に皆無なる点からも明白であり，且つはハーツホーン自身看破する所でもある (Hartshorne1955:209)．当然ハーツホーンも内心穏やかならず，此の誹謗に対して即座に警告的な所感を表明しており (Hartshorne1954)，翌年にはシェーファー論文をほぼ逐語的に「再検討」し，「全体に於て，ほぼ全章に於て，実に各章句の大体に於て，過失，怠慢の孰れによるにせよ，歪曲が為されておる」「地理学に関して何らの新味をも含まぬ」と痛烈に結ぶ反論 (Hartshorne1955:243) を執筆している．その後もハーツホーンの筆は単純な反論に飽き足らず，シェーファー論文中最も粗忽と評すべき，カント，フンボルト，リッター，ヘットナーらドイツ地理学の大家の所説，並びに空間学としての地理学の関係に関する議論の精査に向

かい (Hartshorne1958)，竟にはシェーファーを含む地理学界の新思潮との対比の中で再度自己の思想を開示する体系的な理論書を編むに至る (Hartshorne1959).

この，シェーファーに対するハーツホーン一連の応答こそが，伝統地理学と「新しい地理学 new geography」の方法論上の分水嶺となる，所謂「シェーファー対ハーツホーン論争」(Martin 1989) である．然るに論争とは名ばかりで，ハーツホーンの反論に対するシェーファーの回答を見出す術はない．何となれば則ち，シェーファーは件の「例外主義」批判の発表直前に他界しており，一方が現世に不在である限りは論争などは生じようもなかったのである．それにもかかわらず両者の見解の相違に「論争」の名が与えられるのは，その議論の内に地理学史上稀なる方法論上の対立が鮮明に認められるのみならず，後の地理学の変易に及ぼしたる影響が甚だ深刻であったことに由る．シェーファーの論文は当時こそ注意を惹かず，発表後十年間，米国に於ける引用はただ一例に限られたというが ( 杉浦 1991:303)，若年の学徒の認識を揺るがすには十分であったらしく，ハーツホーンによる反論執筆の動機の一斑も爰に存する (Hartshorne1955:209). その後もワシントン学派やシカゴ学派の形成に隠然と関与したとされ ( 杉浦 1991:318), Bunge(1962) によって「計量革命」乃至は計量地理学の哲学的根拠として称揚されるに及んでは，一転シェーファーを「ハーツホーンの地理学方法論を完全に否定し，地域よりも空間を主導概念とする」( 杉浦 1991:312) 新理論の創始者として歓迎する風が学界を席捲するのである．

「計量革命」が Harvey(1969) により方法論的完成を見た後も，シェーファーの論は計量主義者であるか否かを問わずしばしば参照に与っており，対するハーツホーンと其の方法論の「例外主義」的性質は，今もなお地理学の宿痾の如く厭わるるが一般である．Johnston(1979:55) の「社会科学としての地理学の特異な性質を定義した」とのシェーファー評はその典型であるが，かような通念の流布は Bunge や Harvey らによるシェーファーの論の補足と，ハーツホーンに対する偏った解釈に由る所が大きい．それゆえ，上記の「シェーファー対ハーツホーン論争」は，シェーファーの論難とハーツホーンの応答によってのみ成立するものではなく，寧ろシェーファーを承ける後人の理論構築をも重要な一部として考えざるを得ない実態を有するのである．

それでは，この「論争」の焦点はいづこにあったのであろうか．「論争」の経緯に就ては Martin(1989) 及び杉浦 (1991) を筆頭として十分な研究蓄積が認められるが，その学術的内実に就ては未だ定見がなく，両者は全く相反するとする一般的な理解の他にも，地理学理論としての目的はほぼ一致しながらも方法に於て若干異なるとする Guelke(1978) や，逆に目的のみが異なりむしろ方法の一致を説く Gregory(1978)，或は幾何学的関心という共通項に於て両理論は統合し得るとする Sack(1974) など，見解を異にする研究が少なくない．

しかしながら，両者の争う所は明瞭である．それは，地理学はいかなる概念を対象とする学問であるか，に尽きる (Johnstone1979:55)．シェーファーの提唱した法則科学としての地理学にしても，それに先んじてハーツホーンが論じた総合学術としての地理学にしても，それぞれの地理学を定義する所の者は，その考究の対象となる概念にある．即ち，シェーファーは「空間関係 spatial relation」を対象とすることにより「形態的法則 morphological law」[2] を探究するものとして (Schaefer1953:228,243)，ハーツホーンは「地表面の空間的断片」たる「地域 area」を対象に行う「現実の全面的理解」を本質とし，「世界の地域的相違 areal differentiation」を追求する者として (Hartshorne1939:148,162,395,460,461,468)，地理学を他の学問領域より区分したのである．これには当然，「諸学は法則を探究する」と再三明言し，自然科学と社会科学の区別を絶対とするシェーファー (Schaefer1953:248) と，「地理学は総合学術」でありそもそも「学

問はただ一者より他に存在せぬ」以上，自然科学と社会科学の区分自体が「人知の限界により要求された」「学問の歪曲」と断じるハーツホーン (Hartshorne1939:368) 双方の学問観の天淵たる相異が前提として存在しよう. シェーファーの「諸科学中の例外」なる論難にしても, ハーツホーンの繰り返す「根拠も提示されず引用もない」(Hartshorne1955:222) との反駁にしても，実に，氷炭薫蕕の如く対立する相互の「地理学の対象」たる概念の不合理を暴かんと欲することに於て異なる所はない．それゆえ，相容れぬ前提より導かれ，相容れぬ地理学観の根拠となったこれら空間関係 spatial relation および地域 area の二概念こそが，両者の学説の中心にして，その差異を判明に描き出す論争の焦点と考えられるのである．

是を以て本研究は，シェーファー及びハーツホーンの学説に於て地理学の本質的対象とされる空間関係 spatial relation 並びに地域 area に関する「正名」を目的として，両概念の仔細な検討を期するが，既に述べた通り，紙数の都合，議論を前後篇に分かたざるを得ない。前編たる本稿では，両者の論争に関する既往の解釈の整理，そしてそれら解釈中に内在する問題の剔出を介して，当該論争の争点の明示に努めたい [5].

## Ⅲ　シェーファー対ハーツホーン論争に関する解釈の系譜とその問題点

意外ながら，現代の地理学理論を二分するシェーファーとハーツホーンの論争，乃至は両者の理論に就ての研究は，現状それほど活発ではない．既に述べたように，シェーファーの批判そのものもハーツホーン本人の反論を除いては顧慮を受けぬこと十年に及び，殊にその理論の解釈や評価を伴う研究蓄積は Bunge による 1962 年の称揚以降，即ち「計量革命」の渦中となる 1960 年代から 70 年代の間に集中している．これより先は計量主義が批判の対象に転じたことも関係し，当論争への言及自体が稀となり，触れられるにしても学史のごく一部を成すにとどまるのである．ただし，この種の言及の減少は，必ずしも学術的評価の確定を意味するものではない．それは，1989 年に *Reflections on Richard Hartshorne's The nature of geography*(Entrikin and Brunn1989) と題されたハーツホーン地理学を再考する研究書が出版され，近年もドイツ地理学のハーツホーンへの影響を詳密に論じた Harvey and Wardenga(1998) やシェーファーの方法論の再検討から地理学に於ける理論研究を分類した叶・蔡 (2009)，ハーツホーンを含む米国地理学における地域概念の展開を整理した野尻 (2013) 等の論文が少数ではあれ著されておることからも知られよう. 然りと雖も, 当論争の分析が停滞しておる事実は否定できず, 論争の焦点たる「空間関係」と「地域」の概念の異同に関する検討に至っては，二三の例外を除きほとんど認められぬ．かような学界の趨勢を鑑み，以下，既往研究に於てシェーファー並びにハーツホーン両氏の理論がいかに解釈されたのか，その系譜を整理する．

### 1．Bunge―図式的解釈の系譜

まず，当論争に関する評価の嚆矢となるものが Bunge(1962) の *Theoretical Geography* である．既に述べた如く最初のシェーファー称揚者である Bunge は，シェーファー自身詳細に語らなかった「空間関係」に「距離ばかりではなく，寧ろ形状，次元，パターン，距離，接続の如き，あらゆる地表の幾何学的属性を意味する」(Bunge1962:89) と判明な解釈を附し，一般性を追求する科学的地理学の基礎概念と見做した．一方で，ハーツホーンに就ては非一般的にして非科学的な独自 unique なる概念に依拠する方法論を形成したとして斥ける (Bunge1962:9). Bunge(1962:12) によれば，「シェーファーの論文が一貫して採用するのは一般的術語たる”空間

的 spatial”であるのに対して，ハーツホーンは個性記述的な言葉である“場所 place”を用いる」のであり，この表現の相異，即ち「空間と場所の対立」こそが「両者が一般 general と独自 unique のいづれを基礎とするかの直接的帰結」であるという．

ところが，この Bunge による評価は明らかな誤認を含んでいる．少なくとも地域 area を地理学の対象として詳細に論じたハーツホーンが場所 place なる概念を重視した事実はなく[6]，寧ろシェーファーに於てこそ「場所」の語が経済地理学理論に関する空間関係の規定として用いられておる (Schaefer1958:248) 点は指摘せざるを得ぬであろう．また，独自 unique なる性質も地域 area に関する表現であり場所 place 概念とは無関係である．なお後篇にて詳述するが，この独自 unique とは異質な諸現象を内包することから導かれる地域 area 概念の性質に就ての一表現に過ぎず，Bunge の解釈とは異なり地域それ自体は一般化を拒む概念ではない．ハーツホーンは Bunge が「一般的述語」と見做す空間 space 概念を地域とともに地理学の根本概念と論ずるばかりか, 地理学を「空間学 space-science」と規定しており (Hartshorne1955:220), シェーファーとハーツホーンの間に「空間と場所の対立」を見出すことは不可能に近い．そもそも Bunge はハーツホーンの主著である The Nature of Geography を参照しておらず，非難の的となった独自 unique なる語に関する引用も皆無であるからには，かような誤認が生じたとして何ら怪しむべき所はない．

かくも不正確な Bunge の評価は畢竟従来の方法論を一挙に斥けるべくシェーファーに与したものに過ぎず，固より公正な研究成果としては受け入れ難い．それにもかかわらず，計量主義の興隆に図式の簡便も相俟って，この誤った解釈は大いに流布されることとなった．例えば Haggett(1965:3) はハーツホーンに就て「この独自性 uniqueness なる概念は…我々のあらゆる教育段階での地理学教育に於て強力に保持されており，地域 A は必ずや地域 B と異なるという不可避の確信を学生諸子の内に築き上げている」と評し, シェーファーおよび Bunge によって「独自性 uniqueness とは主観に過ぎず，地域 regions 固有の性質ではない」と指摘されたと述べる．ここでも独自 unique の意味する所は一切検討されず，ただにその概念への反感が述べられるにとどまる．或は高橋ほか (1976:433) は，ハーツホーンの地域概念を独自性 uniqueness の語に基づき単なる特殊事例と解し，その地誌学的手法を単称的経験命題に関するものとしており，対するシェーファーの空間関係は普遍性に依拠し，全称的経験命題の確立を目指したとする．而してこの解釈に基づきハーツホーンは要素を，シェーファーは集合を重視したとするが，やはり論拠が明らかにされることはなく，且つ事実にも反する．これらは孰れも Bunge の説の換言と考えるのが妥当であるが, 以下に紹介する諸説に於ても, Bunge への妄信こそは認められぬものの, 独自 unique の語をハーツホーンの本質とする誤解はほぼ共通して認められる．一度公にされたる虚偽は払拭が困難であるばかりか，誰一人検証を行わぬが故に，時を追うにつれ残響の如く自身を世に示し，愈々現実への擬態を全き者とする．Bunge の独自 unique なる語への解釈は其の好例である．

### 2．Harvey―哲学的解釈の系譜

綿密な論証を以て知られる Harvey(1969:207) は，この安直な図式に盲従することを潔しとせず，ハーツホーンが空間概念を重視した事実を鑑み，「地理学特有の目的は空間的諸概念 spatial concepts によって規定され得るということ」を *The nature of geography* の主要な結論であったとする．同氏によれば，ハーツホーンに於ては「空間に関する in terms of space 諸現象の相互作

用及び統合の記述分析」こそが「地理学者の任務」であったのである．かく Harvey はハーツホーンの方法論を「場所」に関する「個性記述的」なものとは見ず，シェーファー以降の計量主義と同様，一貫して「空間」に依拠すると説く．しかしながら，方法論上の変化を認めぬのかといえばそうではなく，ハーツホーンの空間概念はニュートンとカントに端を発する所の，万物を収容する「容器」としての絶対空間であり，その方法論上の特徴たる地域主義 regionalism 乃至は独自性 uniqueness もひとえにこの空間観に由来するとの論を展開する (Harvey1969:208-209)．同氏は此のハーツホーンによる「絶対的空間観」をガウスによる非ユークリッド幾何学の発見以降発達した「相対主義的空間観」に比して科学的に顧みられぬ旧理論と見做し，当論争に就ても，「ハーツホーンと Bunge の対立は，まさに絶対的空間概念と相対主義的空間概念の対立と解される」と結論する (Harvey1969:209)．つまり Harvey は，ハーツホーンに於ても地理学の対象は空間概念であったものの，シェーファー及び Bunge の批判によって始めて，現代科学の基準を満たす非ユークリッド幾何学に基づく「相対主義的空間」が導入された，と言うのである．但し，「非ユークリッド幾何学」とはユークリッド幾何学における平行線公準の否定の上に成立する幾何学であり，本来「絶対的空間観」と矛盾せぬことは指摘されるべきであろう．Harvey の想定する所は寧ろ，非ユークリッド幾何学を前提として構築された，空間並びに時間を以て物体の属性と為すアインシュタインの空間観であると考えられ，それゆえにこそ「もし空間と物体がもはや本質的に区分できず，また空間の属性がもはやアプリオリに与えられたものと見做されぬのであれば，カント，ヘットナーそしてハーツホーンにより採用された，かの地理学観の為めの論理的な正当化は，もはや維持できぬ」(Harvey1969:212) との記述も生じ得るのである．かくのごとくに Harvey のハーツホーンへの批判は，其の方法論に於ける空間と現象の乖離，或はこれを同氏の理解に基づき換言すれば，空間の物体からの完全な独立，という一点に集約される．

この評価は Bunge の説を継ぎながらもその過誤を正し，地理学に於ける空間観の転換を当論争に見出しており，一見すれば本質を道破する明解と評し得るものである．ところが，Harvey の論を精鑑する限り，やはりここにも瑕疵を認めざるを得ない．第一には，ハーツホーンの地域 area 概念に対する注意の欠如が挙げられよう．下記の地域概念に関する唯一の引用箇所 (Harvey1969:208) から察するに，同氏は空間概念に注視する余り，本来異質である地域と空間とを勢い同一視しているようである．地域と空間が同一の概念とされる例は地理学史上に於ても稀有であり，少なくともハーツホーンに於てはそのような扱いは見られない ( 後篇を参照 )．然るに，この説は宛ら Bunge がハーツホーンの説の中心を場所 place と取り違えたのと同様の，Harvey による誤解釈と考えられる．第二には，絶対的空間観から地域主義 regionalism と独自性 uniqueness が生じるとしながらも，やはり Bunge，Haggett と同様，その論証を欠くばかりか両語の定義さえ失している．第三には，Bunge 及びその基礎を為すシェーファーの空間概念，即ち空間関係 spatial relation が，アインシュタイン的な空間であるとの，つまりは時間とともに物体と不可分の連続体であるとの主張の根拠が不明である．第四には，Harvey はこの時空間を物理学的な意味での物体ではなく，地表面に於て見出される様々な現象の属性としている．これは *The nature of geography* からの「地域 area そのものは現象ではない…」との引用と，ハーツホーンの方法論には「地理学的空間は本質的に絶対的存在」，つまり空間が物体より独立する絶対者であるとの「暗黙の前提」が潜在したとする部分 (Harvey1969:208) からも明らかであろう．Harvey はハーツホーンの地域概念を「絶対的空間」として，その内部の「現象」と別個であるが故に，「空間と物体がもはや本質的に区分できない」現代科学と相容れぬとする．この推論は

現象と物体が同一の概念であるとの前提なくしては成り立たぬが，現象と物体とを何の説明も無しに同一概念と見做すのは一般に承服し得ぬ論理的飛躍である[7]．然るに此の飛躍を含む解釈が，引用もできぬ「暗黙の前提」に基づくとなれば，やはり強解の誹りは免れまい．

かく，Harvey の説明も十全ではなく，Bunge 以来の混乱の系譜をも継ぐことは疑いを容れぬ．一方で其の分析が「計量革命」の発端たる当論争の意義を学界に知らしめ，亦た，同氏の解釈の内奥に潜む論理の不完全が，当論争に関するより精確な読解を惹起したことも事実である．次節に記す Sack の論も，Harvey 無くして生ずることはなかったであろう．

## 3．Sack―折衷的解釈の系譜

Sack(1974) による研究は，Harvey を含むこれまでの解釈を敷衍しながら孰れの思想にも加担せぬ中立を示す者である．Sack はハーツホーン並びにシェーファーの方法論をそれぞれ伝統地理学 chorology と空間分析 spatial analysis を代表するものと解し，而して両者の折衷を試みる[8]．其の所説によれば，ハーツホーンは地理学の対象を，「自らの諸部分とそれら部分の相互関係が総合された」「独自 unique」なる「現実存在 actuality」，即ち「特殊地域 specific region」であると定めたが (Sack1974:441)，実は此の「特殊地域」は「法則定立的方法の不十分と不完全によって残された余剰物より生ずる」(Sack1974:442) もの，つまりは「一般化に例外が見出される場合」現れるものであるという (Sack1974:443)．更に，ハーツホーンに連なる伝統地理学とシェーファーを奉ずる空間学派の「幾何学的連結の強調」なる共通点を鑑みれば，両者は既に「要素間の幾何学的結合を含む様式中の説明的完全性の段階に移行する傾向」を示しており，且つ此の一点に於て統合が果たされるべきであると結論する (Sack1974:452)．

Sack の当論争に対する評価は穏健中立，新旧両派の意義を認めつつも，先行する諸家への批判，特にハーツホーンの方法論に関する解釈の不備の是正を忘れなかった．シェーファーと Bunge に就ては，ハーツホーン的地域概念の「独自性 uniqueness に焦点を絞り，相関する他の様相を無視した」と排し (Sack1974:443)，Harvey に就ては「地域を科学的システム或はは生態系モデルと同一視することによって，その総合」，即ち地域の「非法則的側面を無視した」(Sack1974:444) と断ずる如く，Sack はハーツホーン及び伝統地理学の一面を擁護しつつ，それらへの徒な非難を斥けたのである．同氏はまた，Harvey の解釈に反し，ハーツホーンに於ける空間は「空虚ではなく」，従って諸現象から分離される概念ではあり得ぬことを指摘しており (Sack1974:441)，此の点でも先行例とは一線を画している．此れは地域の独自 unique なる性質の解釈とも関係しており，Sack によれば，ハーツホーンの所謂「地的学術 terrestrial sciences」，つまり地理学一般は，「ユークリッド空間・時間内に生起する所の諸事諸物乃至は諸現象に関与せるもの」であり，「空間それ自体は諸事の位置或は延長と関係する」(Sack1974:440-441)．そしてこの「諸事」は「空間内に独自に uniquely 位置づけられ（もしくは延長され），不均等な分布と結合を形成している」のであって，「地表に於ける此れら不均等な空間的結合を顧みるが故にこそ，我々は独自 unique 乃至は特殊地域・地域・場所 specific region，area, place なる概念を用いる」(Sack1974:441) と説明する．Sack は，これまでハーツホーンの非科学性の根源と非難され続けた，地域の独自 unique なる性質を，空虚ならざる空間と諸事諸物の結合に起因するものと見，単にそれらが空間内に各々固有の位置を有することを表現したに過ぎぬと解するのである．ここで Sack は，シェーファー以来非難の的であった独自 unique なる語に初めて価値を認めたのみならず，その定義を判明に論じたのであった．

かくしてSackはハーツホーン及び伝統地理学を，空間学派の主張する「科学的」立場に符合する者と考え，新旧理論の融合を図った．しかしながら，本来対立する二派の折衷のために強引な論法が用いられたことも事実である．その最たる者は，特殊地域specific regionなる術語をハーツホーンの学説の中心概念として強調したことであろう．そもそもハーツホーンが特殊地域specific regionなる術語を用いるのはヘットナーの比較地誌学に関する方法論の解釈に於てであって，自説の展開に於てではない[9](Hartshorne1939:305)．かつSackは，ハーツホーンの論ずる「伝統地理学の方法論的議論」が，「特殊地域・地域・場所specific region, area，place」(Sack1974:440)に関係すると述べるものの，ハーツホーンはregion，areaの両語を厳密に区別しており(Hartshorne1939:392)，placeに至っては前述の如く何ら重視されておらず，一般語として文中に見えるに過ぎぬ．此の歪曲のもたらす論旨の綻びは引用に際しても露呈しており，例えばSack(1974：441)は「特殊地域specific areaの意義」として「抽象的に区切られた空間に見出される，相互に関係した全現象の総和sum totalに過ぎない」(Hartshorne1939:395)なる定義を引くが，この文章は本来地域area概念の定義であり，原文には特殊地域specific areaなる語はない．これはSackも自覚した上での記述であり，特殊地域を論じる場合には一貫してspecific regionなる語を用いるにもかかわらず，この一文のみ原文に配慮しspecific areaと書き換えている．特殊地域specific regionがSackの論拠の中心を為す以上，ハーツホーンの地域area概念にも「特殊specific」の句を添えられておらねばならぬ，との判断ではあろうが，かような“補足”が微細とはいえ歪曲にほからなぬ限り，それが同氏の論に陰を落としていることは疑いを容れない．此の種の断章取義は論文全体に散見されるが，「もし我々が，空間概念が物質的基礎と連結せざるを得ないと認めるとすれば…」(Hartshorne1939:199)云々という十八行に亘る引用によるハーツホーンの空間概念に就ての説明もその一例である．Sackの引く文章は元来サウアーの景観論への反駁であり，その論ずる所は空間概念の性質ではなく，「地理学が自らを物質的な学術と制限することなど本質的に不合理」(Hartshorne1939:201)であること，即ち地理学が非物質的現象を扱うべきことの証明にある．況や之を以てハーツホーンの地理学が「ユークリッド空間・時間」に於て為され，而もその空間概念が空虚に非ざるとの自説の根拠とするSack(1974:441-442)の論は不適切である．

更に言えば，此の「ユークリッド空間・時間」の如き表現に見られる知識の不正確が同氏の混乱を助長している．何となれば，ユークリッド空間とはユークリッドの公準を満たす幾何学的空間を意味しており，本来「ユークリッド時間」なる概念が並列されることはなく，数学上存在を認められておらぬ概念である．当然ながら『ユークリッド原論』にも「ユークリッド時間」の記述は見られない(ユークリッド1970)．然るに，上述の如くSackのハーツホーン解釈は此の「ユークリッド空間・時間」と不可分であるから，此の概念の介在によって全体の信頼を欠くこととなる．かような内容不明の概念が論旨の樞紐に坐しておる以上，同氏の新旧理論の折衷案は畢竟強解と言わざるを得ぬのである．詮ずるに，Sackは学界に蔓延した誤解こそ排するに努めたが，ハーツホーンを借りて自説を展開し，新たな誤解を継ぎ足したのであった．

しかしながら，このSackの解釈は当論争に於けるハーツホーンの再評価，或は折衷的解釈の類例を生んだことには功があった．例えばGregory(1978:31)は，直接に観測することのできぬ現象をも扱うべきとするハーツホーンの方法論を「明らかにコント流の実証主義と同類であり，シェーファーが地理学の存在意義として認めるに吝かでないもの」とし，地理学は形態的法則を生成するとのシェーファーの見解に就ても「方法に於てハーツホーン自身の見解と調和する」と

評する．然るに「ハーツホーンとシェーファーとは目的に於て反目するのであって方法に就てはそうではない」(Gregory1978:32) と結ぶが，これは Sack の説く，伝統地理学の個性記述によって空間学派の法則定立を補助するとの解釈と軌を一にする．また, ハーツホーンを論ずる際に「特殊地域 specific region」の語を用いる点でも同氏は Sack の影響下にあると見てよいであろう．或は Guelke(1978)，Entrikin(1981) も，地理学の本質や他領域との関係に就ての見解の相違はあれど，やはりハーツホーンとシェーファーの研究手法の近似を唱える例である．

これらの折衷的解釈の存在はハーツホーンの方法論をさながら克服された旧理論の如く扱う従来の気運をやや緩和したと言える．而して今尚，シェーファーに与する評価が大勢であることには変わりなく，Harvey や Sack の指摘した Bunge 以来の誤解も多数の研究に於て取り払われておらぬ点には注意を要する．或は「“specific region”にはいくらかあいまいな二重性があるが，どちらにしてもハーツホーンが specific=unique という表現をしたために，これが通俗化と誤解を生むことになった」とする野間 (1976:4) の如く，特殊地域 specific region なる Sack の用語乃至は観点を以てハーツホーン批判の資とする例も見受けられる [10]．ある種の「正名」を目指した Sack の論中の新たな錯誤が, 従前の誤解と結合してそれを補強しておるのである. これもまた，「名を正す」ことよりも自説の展開を優先した結果もたらされた混乱と言えよう．

### ４．Johnstone―学史的解釈の系譜

Johnstone(1979) による当論争の評価は学史としては最も広範に流布する者の一つであるが，既に述べたるが如き誤解を種々内包する解釈の典型でもある．Johnstone は, ハーツホーンを「科学的方法の大変な擁護者」であったと認めながらも「独自性 uniqueness に就ての見解のために」自家撞着に陥ったと指摘し (Johnstone1979:60-61)，対するシェーファーに関しては「初めて科学の性質を概説し，社会科学としての地理学の特異な性質を定義した (Johnstone1979:55)」「全き実証主義的態度を受容し，独自性 uniqueness が科学の一般的問題であり，地理学特有のものではないことを示した」(Johnstone1979:61) と其の功績を強調する．これらの文言には独自性 uniqueness を以てハーツホーンの難点としながらも，その語義も，方法論上の難点たる所以に就ても何ら論究されぬという Bunge と同根の問題が発見されよう．然るに「例外主義」を「地理学はその研究対象―独自 unique なる場所 places あるいは地域 regions―の特異なる性質のために他領域と方法論を共有せぬ」思想であり，シェーファーはこれを批判し「地理学は独自 unique なる諸現象への注視に特化するものにあらず」と異論を唱えた (Johnstone1979:55) との評を合わせ見れば，Johnstone はハーツホーンに於ける独自 unique なる研究対象が地域 area ではなく place 或は region と見做すのみならず，それらを現象そのものと解しており，またも Bunge と同帰の錯誤に陥っていることが明らかとなる．

かような初期の解釈のみの参照に基づく議論の遅滞は Johnstone に限らず松本 (1975) 或は Peet(1998) 等，当論争以外に主要な論題を持つ学史的著作にしばしば認められる所であるが，惜しむらくは，ハーツホーンの再評価を企図した Entrikin and Brunn(1989) に所載の方法論に関する論文が其の例に洩れぬことである．この書に於ては，Smith(1989), Agnew(1989), Sack(1989) によって当論争の方法論的側面に関する議論が為されるが，Smith(1989:103) はハーツホーンの地域概念をカントの所謂物自体を欠いた「感性の形式」たる空間と解した上で，「現実から一層明確に分離される」と Harvey の主張を繰り返すのみであり，Agnew は「場所 place」「局所性 locality」なる術語を用いる学派とハーツホーンとの理論上の連続を説くものの

(Agnew1989:126-127)，その基づく所は地域を単なる要素複合とする Johnstone 同様の解釈に過ぎぬ (Agnew1989:124)．Sack はハーツホーンに於ける「地域 place, area, or region」概念が「意味，自然，社会関係，人的主体性 human agency の四領域より成立する」(Sack1974:142) とし，この四領域よりハーツホーンの方法論を詳細に解釈するが，その所説は畢竟当時流行の人文主義地理学との付会であって，嘗て同氏が計量主義との折衷のために用いた強引な論法を再三するにとどまる．かくのごとくであってみれば，同編著の冒頭に記された「一般に *The nature of geography* は過去の地理学の遺物として言及されている」「批判に対するハーツホーンの応答は往々にして無視された」という Entrikin(1989:3,7) の嘆辞も，錯誤の残響に紛れ虚しく響くのみである．

## Ⅳ　小括：シェーファー対ハーツホーン論争の争点

以上の如く，シェーファーとハーツホーン両氏の方法論をめぐる論争に関する研究は，起源を異にする複数の誤解，乃至は解釈者の牽強付会が根絶されぬままに入り乱れており，特にハーツホーンの地理学理論は未だ共通見解さえ定まらぬ状況にある[11]．Entrikin and Brunn(1989) 以降も，Gauthier and Taaffe(2002:508) の如く従来のハーツホーン理解を「誤解釈」と明言する研究が現れる傍ら，ドイツではヘットナーの方法論はハーツホーンよりも寧ろシェーファー的な科学二分論の先蹤であったとの論及も散見される，との報告も残されている (Harvey and Wardenga1998:138-139)．而してこれらの孰れにも，出典を伴う厳密な考証は認められぬ．斯く，当論争に就ての議論は収拾に向かうどころか，只管に混乱の度を高めては已まぬ．この出典の欠如こそはまさに，当論争に関与する幾多の述作が，「往々にして論理を欠く (Martin1989:85)」所以である．

かくのごとき現状を鑑みるに，シェーファー及びハーツホーン両氏の学説を正確に評価するためには，以下の二点に関して理解を新たにする必要があろう．即ち，１）シェーファーにおける地理学の対象たる空間関係 spatial relation 及びその目的とされる形態的法則 morphological law なる概念，２）ハーツホーンにおける地理学の対象たる地域 area 概念および各者の解釈が全く一致せぬにもかかわらずハーツホーンの方法論上の弱点として批判に晒され続ける“独自 unique”なる地域概念の性質，の双方に就て明解を与えねばならぬのである．

是の故に，本研究は空間関係 spatial relation と地域 area の仔細な検討，即ち「正名」を企図するが，これには，Entrikin(1989:7) の言うが如く，「従前の批判的なそれに依拠せず，著作そのものから解釈を引き出す」ことが要求されよう．全ての混乱の原因たる出典の不明は一切排除されねばならぬ．本研究が専ら両者の著作に基づき論述を行うのもこの為めである．詳細は後篇を参看されたい。

本稿は日本地理学会 2017 年春季大会（於：筑波大学）での発表内容の一部を敷衍したものである．

### 注

1)『論語』の訳文は筆者によるもので，一般に古注と称される邢昺の『論語注疏』( 十三經注疏；中華書局本 ) を参考にした．

2) 筆者の従前の地理学的研究たる，現代地理学に於ける「空間」( 益田 2015)，及び唐宋の易注に見られる「地

理」(益田 2018) に関する概念検証に就ても，その実，「正名」を為さんとして行われた者である．諸般の事情にて両論文は「正名」並びに儒学への言及を憚らざるを得なかったものの，企図する所は同一である．

3) 本稿では Schaefer, Hartshorne の両氏に就て，各々「シェーファー」「ハーツホーン」と邦字を以て記す．本稿が和文による論文である限り，少なくともその議論の中心を為す人物に就ては邦字により表記すべきと考えるが故である．なお，両氏の仮名表記は先行する訳例(野村 1957; 山岡 1975; 野間 1976) に基づく．

4) morphological なる語はしばしば字義通り「形態学的」，或は「形態論的」と訳されるが，シェーファーの morphological の用例を見る限り，単に形態一般を指す語として使用されていることは明らかである．そのため，本稿では「形態的」との翻訳を与えている．

5) 本稿に於ける外国語文献引用文の翻訳は筆者自身による．参考文献中には主として取り上げるシェーファー並びにハーツホーンの著書をはじめとして先行する翻訳も少なくないが，当然ながら訳者によって翻訳の基準が異なり，「area」なる一語が一方では「地域」(野村 1957)，一方では「空間」(山岡 1975) と訳され，亦た，本来対立的な語彙である「chorological science」(地誌学を中心とする所謂「伝統地理学」) と「spatial science」(計量主義的な所謂「空間学派」) とが翻訳の相違によって双方「空間科学」(江沢 1969; 野間 1976) とされるなど，直接引用した場合に議論の混乱が懸念される例が認められる．そのため，已むを得ず筆者の手で翻訳の統一を行った次第である．これに加え，双方「地域」と訳されることが一般である area，region などの紛らわしい語に就ては，強引に訳語を割り当てず，和訳の直後に原語を付した．

6) ハーツホーンは area 並びに region に就て *The nature of geography* に於て数章を割き詳述しており，それぞれの語に対して周到な分析と厳密な定義を与えている (Hartshorne1939:250-459 同書第九章～十一章を参照)．その一方で，Bunge がハーツホーンの本質と断ずる place に関しては学術的な言及をその著作中に認めることはできぬ．ハーツホーンが place を重視せず，学術的概念としての地位を与えておらぬことは，同書末尾に付された語句索引 (Hartshonre1939:476-482) が，area 並びに region の両語を熟語とともに列挙するのに対し，place に就ては項目すら設けておらぬ点からも窺われよう．なお，無理に用例を見出すならば，*Perspective on the nature of geography* に於て「場所の概念 the concept of place」なる語を用いる箇所を発見することも可能ではある (Hartshorne1959:157)．しかしながら，ここでもやはりこの「場所 place」は単に一般語として用いられているに過ぎぬのである．付言すれば，同箇所は「地理学に於ける一般的研究及び特殊的研究の必要」と題された節であり，Bunge はこの表題を以てハーツホーンの理論と速断し，同箇所のみに基づき持論を展開したとも推定される．

7) 言うまでもないが，物体と現象は概念として本質的に異なる．物体は一般に延長と質量を有する存在を意味し，対する現象は何らかの対象として認識されたる存在一般である．例えば，物体としては「水」であっても，現象としては，「河川」や「降雨」或は「洪水」や「噴水」等と化し，他の物体や認識と複合すれば「水害」といった現象にも成り得る．

8) Sack(1974:440) は，「伝統地理学 chorology」を「個性記述的」「質的」「人文主義的」方法によって，「空間分析」を「法則定立的」「量的」「科学的」方法によって，各々その特徴とすると注する．ここからも窺われるように，Sack の所謂「伝統地理学 chorology」は計量地理学を批判する人文主義的地理学等の後続諸派をも含む広範な意味に於て用いられる．なお，ここでは字義としては「空間学」と訳すべき chorology を「伝統地理学」としたが，これは Sack の用法に従うものであり，同箇所の「chorology の目的は地域的差異乃至は統合という地理学的方法を介しての地表の理解にある」(Sack1974:440) といった定義に依拠している．

9) この特殊地域 specific region なる術語自体，イギリス地理学からの引用であり (Hartshorne1939:305) ハーツホーンによる造語や翻訳の類ではない．

10) 野間 (1976:4) が例証として挙げるのは *The nature of geography* の 311 頁である．当該箇所には「世界区分の“現実的体系”の内にあっては，我々の論述の如く，各地域 every region は独自 unique なるものと認識され，且つ諸地域はその実際の関係と結合している (Hartshorne1939:311)」とあるが，この“現

実的体系”とは前述のヘットナーの比較地誌学に関する方法論を指しており，直前の議論を承ける限定的な論述に過ぎない (Hartshorne1939:305)．また，この一文には野間の言うような「specific=unique」といった直接的な表現は見出されない．

11) 立岡 (1985:208-210) の記す通り，ハーツホーン，特に *The nature of geography* の解釈に就てはシェーファーとの論争を俟たずして大小の誤解の流布が確認される．

## 文献


今井宇三郎 1958.『宋代易学の研究』明治図書出版 .

杉浦芳夫 1991. Schaefer の「例外主義」論文誕生の顛末に関する一考察．地理学評論 Ser. A64:303-326.

高橋 潤二郎・斎野 岳廊・石川 純・石塚 耕治・杉浦 章介 1976. 地理学における「計量革命」の意味．地理学評論 49:427-439.

立岡裕士 1985. 現代地理学史の分析枠の構築に向けて―Hartshorne パラダイムを例として―. 人文地理 37:1-22.

内藤正典 1994. 地誌の終焉．法政地理 22,32-43.

ユークリッド著　中村幸四郎・寺坂英孝・伊藤俊太郎・池田美恵訳 1970.『ユークリッド原論』共立出版株式会社 . Euclidis 1883-1886. *ELEMENTA.* in *Eulidis prera omnia.* Ed. Heiberg, I.L. Menge, Lipsiae.

中山修一 1996. 地誌学と地域研究の在り方に関する日本的解釈の展開 . 地誌研年報 (5), 77-92.

野尻亘 2013. アメリカ地理学における地域概念の形成 . 国際文化論集 47:75-92.

野間三郎 訳編 1976.『空間の理論―地理科学のフロンティア―』古今書院 .

益田理広 2015. プラグマティズムに基づく地理学的空間概念の弁別 . 地理学評論 88: 363-385.

益田理広 2018. 唐宋易学における「地理」の語義の変遷 . 地理空間 11: 19-46.

松本正美 1975. ハーツホーンからハーヴェイへ―現代地理学の論理―. 地理学評論 49:655-668.

森川 洋 1992．地誌学の研究動向に関する一考察．地理科学 47,15-35.

阮元 1980『十三經注疏』中華書局 .( 中国語 )

叶超・蔡运龙 2009. 地理学方法论变革的案例剖析—重新审视《地理学中的例外论》之争 . 地理学报 64:1134-1142.( 中国語)

Agnew, J.A. 1989. Sameness and Difference: Hartshorne's *The Nature of Geography* and Geography as Areal Variation. In Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. ed. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography.* Washington, DC., The Association of American Geographers:121-140 .

Bunge, W. 1962. *Theoretical geography.* Lund Studies in Geography, Ser. C, No, 1, C. W. K.Gleerup,. Lund.. バンジ，W. 著　西村嘉助訳 1970.『理論地理学』大明堂.

Entrikin, J.N. 1981. Philosophical issues in the scientific study of regions. In Herbert, D. T. and Johnston, R.J. ed. *Geography and the urban environment: Vol.4,* :1-27. Chichester, John Wiley.

Entrikin, J.N. 1989. Introduction: *The Nature of Geography* in Perspective. In Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. ed. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography.* Washington, DC., The Association of American Geographers:1-15.

Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. 1989. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography*. Washington, DC., The Association of American Geographers.

Gauthier, H.L. and Taaffe, E.J. 2002. Three 20th Century "Revolutions" in American Geography. *Urban Geography* 23(6):503-527.

Gregory, D. 1978. *Ideology, Science and Human Geography.* London, Hutchinson.

Guelke, L. 1978. Geography and Logical Positivism. In Herbert, D. T. and Johnston, R.J. ed. *Geography and the urban environment: Vol.1,* :35-61. Chichester, John Wiley.

Haggett, P. 1965. *Locational Analysis in human geography.* London, Edward Arnold. ハゲット，P. 著　野間三郎監訳　梶川勇作訳 1978.『立地分析・上』大明堂.

Hartshorne, R. 1939. *The nature of geography: A critical survey of current thought in the light of the past.* Lancaster, PA: The Association of American Geographers. ハーツホーン，R. 著 野村正七訳 1957.『地理学方法論：地理学の性格』朝倉書店.

Hartshorne, R. 1954. Comment on "Exceptionalism in geography." *Annals of the Association of American Geographers* 44:108-109.

Hartshorne, R. 1955. "Exceptionalism in geography" re-examined. *Annals of the Association of American Geographers* 45:205-244.

Hartshorne, R. 1958. The Concept of Geography as a Science of Space, from Kant and Humboldt to Hettner. *Annals of the Association of American Geographers* 48:97-108.

Hartshorne, R. 1959.*Perspective on the Nature of geography.* Washington, D.C., R. McNally. ハーツホーン，R. 著　山岡政喜訳 1975.『地理学の本質』古今書院.

Harvey, D. 1969. *Explanation in geography.* London, E. Arnold. ハーヴェイ，D. 著　松本正美訳 1979.『地理学基礎論：地理学における説明』古今書院.

Harvey, F., Wardenga, U. 1998. The Hettner—Hartshorne Connection: Reconsidering the process of Reception and Transformation of a Geographic concept. *Finisterra,* XXXIII, 65:131-140.

Johnston, R.J. 1979. *Geography and Geographers: Anglo-American Human Geography since 1945 (fifth edition).* London, Arnold.

Martin, G. J. 1989. The Nature of Geography and the Schaefer-Hartshorne Debate. In Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. ed. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography.* Washington, DC., The Association of American Geographers: 69-88

Peet, R. 1998. *Modern Geographical Thought.* Oxford, Blackwell.

Sack, R.D. 1974. Chorology and Spatial *Analysis. Annals of the Association of American Geographers,* Vol. 64, No. 3:439-452.

Sack, R.D. 1989. The Nature, in Light of the Present. In Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. ed. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography.* Washington, DC., The Association of American Geographers: 141-162.

Schaefer, F. 1953. Exceptionalism in geography: A methodological examination. *Annals of the Association of American Geographers* 43:226-249.

Smith, N. 1989. Geography as museum: Private History and Conservative Idealism in The Nature of Geography. In Entrikin, J. N. and Brunn, S. D. ed. *Reflections on Richard Hartshorne's The Nature of Geography.* Washington, DC., The Association of American Geographers: 89-120.